

軍都の面影を残す 宇都宮中央女子高赤レンガ倉庫

宇都宮伝統文化連絡協議員 柏村 祐司

第二次世界大戦前、宇都宮市は軍都として賑わった。宇都宮市が軍都として発展するきっかけは、日露戦後の明治四十(一九〇七)年十一月、兵庫県姫路に凱旋した陸軍第十四師団を宇都宮市に誘致したことによる。当時の宇都宮市は人口約四万人で、これといった産業が無く、経済発展が見込まれなかった。そこで十四師団を誘致すれば、多くの施設が出来、多くの兵士がやつて来れば経済的に潤うとのことで、市民上げて誘致運動を展開したのである。



改修後の赤レンガ倉庫

第十四師団の宇都宮移駐が決まると明治四十二(一九〇八)年十一月に各部隊に先立って歩兵六十六連隊がやつて来た。その後第十四師団司令部、第二十八旅団司令部、騎兵十八連隊、野砲兵第二十連隊、輜重兵第十四大隊、歩兵五十九連隊等がやつて来て軍都としての体制が整った。

現在、宇都宮中央女子高内にある赤レンガ倉庫は、歩兵六十六連隊の厨房・食堂・米庫・浴場等の施設を備えた建物として建てられたのである。この建物は切妻・平屋建てで、基礎は割栗石とコンクリートの上にレンガを積み芦野石を化粧台に置き、外壁はイギリス積のレンガ造で、屋根は木造トラスト構造の小屋根に腰屋根根を乗せている。大きさは、南北に約二六メートル、東西に約九メートルあるが、建築当初は今よりも規模が大きく南北に約八二メートルあった。

ところでこの建物は、建築後数奇な運命をたどった。最

初は、第一次世界大戦後の世界的な軍縮による歩兵六十六連隊の廃止に伴うものである。六十六連隊が廃止されたのは、大正十四(一九二五)年で、その後赤レンガ倉庫を含め兵営地はしばらく空き地となっていた。昭和三十(一九二八)年、兵営地跡に市内松原にあった栃木県師範学校が移転された。赤レンガ倉庫は、そのまま六十六連隊当時と同じく厨房、食堂、浴場として使われた。昭和二十四(一九四九)年、国立学校設置法施行に伴い、師範学校は新制宇都宮大学へと統合され、赤レンガ倉庫は学芸部の理科実験室となった。

その後、昭和二十七(一九五二)年、学芸学部が峰町に移転したため、再び空き家となったのである。

今日の宇都宮中央女子高の施設となったのは、昭和三十(一九五六)年、市内松原から宇都宮松原女子高校が移転してからである。なお、松原女子高は、翌年宇都宮中央女子

高として改称された。しかし、この時の赤レンガ倉庫は、まだ建築当初の規模であった。中央女子高に隣接して県立聾学校が設置され、赤レンガ倉庫の西側三分の二が聾学校使用となった。それが昭和五十年代に取り壊され、中央女子高側三分の二だけが残った。今日見る赤レンガ倉庫の姿である。

中央女子高では、昭和三十五年まで理科実験室に、その後は運動クラブの部屋や倉庫として使用された。平成十二年、赤レンガ倉庫が、第十四師団の施設としては唯一の遺構であり、貴重な歴史的建造物として国の登録文化財となった。平成十三年改修新築し、現在は多目的ホールとして使用されている。戦争と平和の間でこれだけ数奇な運命をたどった建物は少ない。まさに歴史的遺構である。



多目的ホールに改修された内部